# 阪神

お墓のあれこれ
富永石材 検索
㈲富永石材
明石市樽屋町10-4 ☎911-6233

# かいごのいろは

## つどい場 さくらちゃんから

34

## 行政や社会がバックアップを

西宮市のNPO法人「つどい場　さくらちゃん」に出会い、支えられた介護家族の話を、昨年5月から、NPO理事長の丸尾多重子さんの一言アドバイスとともに掲載してきた。最後に、介護家族や医療、福祉関係者のあるべき姿や、来月4日に関西学院大で開くフォーラム「かいご学会」などについて、丸尾さんに聞いた。【聞き手・香取泰行】

### まるちゃんに聞く

――連載では家族を取り上げてきました。

介護のかなめは家族。介護は二者択一。本人の意思を代弁し、在宅か入院かなどの選択をするのは家族しかいない。ハラをくくり、賢くならなければならない。また、そこに至るまでの支えが大切です。

――社会では認知症への偏見も多い。

認知症は怖いことではありません。嫌なことを忘れて幸せな時代に戻る、自分に正直になれる。本人にとったら、不安はあっても幸せなことかもしれない。一緒に外を歩いたり、話をじっくり聞くだけで落ち着くこともある。

――時代や介護の世界も変わっています。

一言で言うと、お年寄りが「このまま生きていていいのだろうか」と思う時代になっている。介護保険についても、介護される本人のための制度だろうかと思うことも多い。どこの施設に行っても、お年寄りが楽しそうじゃありません。

――丸尾さんは「まじくる」という言葉をよく使います。

5年前に西宮市で介護のフォーラムを開いたら、「介護家族の話を始めて聞いた」という介護職の人が多かった。それではダメ。医療と介護、家族や施設が対等の立場で一緒になる。今は関係が薄くなった〝ご近所〟も一緒に。それが「まじくる」ということです。

――連携ですね。

介護保険制度では点数が高いため、訪問看護は敬遠されがちですが、いざという時に医療とつながっているためには、訪問看護師の存在が大きい。特に在宅介護では医療の支えが必要。これから在宅医療を充実させるというが、実際の受け皿がどれだけあるのか心配です。

――今年で「かいご学会」は5回目です。

半年前から月1回、実行委員会を開いて相談しています。今年のテーマは「かしこい活き方」。福祉や医療関係者に介護家族が混じって話し合い、会場にメッセージを送ります。また、愛知県長久手市から、高齢者施設や幼稚園、多世代交流住宅などがあるゴジカラ村を作られた吉田一平さんを招きます。

――これからの介護に期待することは？

「私もつどい場をやりたい」という若い人が「さくらちゃん」を訪ねてきます。今の施設や介護の仕組みに違和感を持っている人が増えているからでしょう。若い人には可能性があります。行政や社会福祉協議会がバックアップしていってほしいと思います。＝おわり

「つどい場　さくらちゃん」で介護のあり方について話す丸尾多重子さん

### 来月4日にフォーラム「かいご学会」

「介護」「医療」「ご近所」の頭文字から名付けた、介護に関するフォーラム。3月4日午前10時～午後4時45分、西宮市上ケ原一番町の関西学院大学G号館。参加費3000円（学生1000円）。

問い合わせはNPO法人「つどい場　さくらちゃん」（0798・35・0251）。

阪神

あなたの健康応援しま
宝塚第一病院 宝塚リハビテーション
救急告示 労災指定 天然温泉
www.takarazuka-daiichi-hp.or.jp www.takara-reha.c

# かいごのいろは

つどい場さくらちゃんから ㉝

## 伴走者支える仕組み必要

腹に穴を開け、管で胃に栄養などを直接補給する胃ろう栄養法。脳卒中の後遺症や認知症、体力の衰えなどで口から飲食できない場合に利用される。西宮市の男性(75)の場合はアルツハイマー型認知症だった。

大阪市旭区の松本診療所(ものわすれクリニック)院長、松本一生医師(55)は、認知症の診断を受けた患者と家族について、3段階で支援する必要があると指摘する。最初の段階が患者本人が病気を受容できずに不安やいらだちを感じ、家族も症状が軽いために病気を受け入れることが難しく戸惑う時期だ。この男性の家族も当初、「できるだけこれまで通りの生活ができれば」と期待した。

一般的に状況は、症状の進行に伴って患者の暴言や被害妄想、徘徊などの周辺症状の被害が家族に向かう時期、そして誤嚥(ごえん)(誤って気管に飲み込むこと)など身体的な変化が相次ぐ時期へと移行する。各段階で周囲の支援が必要だが、知人や地域に認知症だと告げることができる家族は少ない、という。

松本医師は認知症について「なってからが勝負の病気と知ってほしい。初期の段階から必要な量の薬だけを使い、ケアを重視すればうまくいく」と話し、「患者が天寿をまっとうするには、伴走者が必要」と指摘する。

西宮市の男性の場合は、家族がNPO法人「つどい場さくらちゃん」に出会い、尼崎市の長尾和宏医師(53)を紹介され、「誤嚥性肺炎の恐れは、口から食べなくても食べても一緒」という言葉に支えられて努力し、再び口から飲食できるようになった。

伴走者は家族であり、その家族を支える社会の仕組みだ。今、その仕組みを作るための取り組みが求められている。

【香取泰行】

つどい場さくらちゃんは3月4日、松本、長尾両医師や介護家族らが参加するフォーラム「かいご学会」を西宮市の関西学院大で開きます。次回は理事長の丸尾多重子さんにかいご学会や活動に込めた思いを聞きます。

### まるちゃんから ひと言

「地域で支えるには、まず認知症への偏見をなくさな」(つどい場さくらちゃん理事長)

阪神

お墓のあれこれ 富永石材 検索
㈲富永石材
明石市樽屋町10-4 ☎911-6

# からだのいろは

つどい場さくらちゃんから ㉜

## あきらめず「食べる」道を

西宮市の男性(75)は09年10月、市内の病院で腹の表面から管で胃に直接、栄養を補給するための「胃ろう」を造った。しかし、在宅介護で少しずつ口から食べさせ、10年5月には胃ろうからの栄養剤注入を止めて、白湯と薬だけにした。自分で管を抜いたのは、それから約1年後のことだった。

男性は05年11月に西宮市の心療内科クリニックでアルツハイマー型認知症の診断を受け手術を勧められた。入院前に診断を受けた近所の内科医からも、「胃ろうをすれば家族は今まで以上に大変だが、胃ろうをしなければ半年もたない」と言われた。

感染症の恐れはないのか、本人が栄養剤注入に抵抗したら、介護サービスは受けられるのか……。すべてが不安だった。「夫に判断能力があれば、胃ろうの手術を望むだろうか」。妻は「当時はそんな答えのない問いかけばかりをしていました」と話す。

娘もインターネットで胃ろうについての情報を集めた。妻は不安を抱えたまま手術を依頼。今は口から飲食できるようになったが、当時の選択について「体重も戻ったし、あの時は良かったのではないか」と話す。一方で、「手術をするかしないか、という二者択一ではなく、口で食べるという道を探ることもできたのではないか、という思いもあります」と打ち明ける。

09年末から男性の主治医を務める尼崎市の長尾和宏医師(53)は「胃ろうを安易に造るなら問題。口から食べることへのあきらめが早すぎる場合がある」と説明。日本では胃ろうが延命措置になっている面があるが、「延命治療の中止は現実には難しく、一度造ると外せなくなる場合が多い」と問題点を指摘している。

【香取泰行】

＝つづく

## まるちゃんから ひと言

「胃ろうについて、自分の意志を家族に伝えておくことも大事」(つどい場さくらちゃん理事長)

# 阪神

お墓のあれこれ 富永石材 検索
㈲富永石材
明石市樽屋町10-4 ☎911-6233

天気 きょう 6時
尼崎 10 3 80
神戸 10 3 80
三田 8 2 80

## かいごのいろは ㉛

つどい場さくらちゃんから

# 胃ろう選択に家族苦悩

昨年5月4日、東日本大震災の支援方法を探るため、被災地に入っていた尼崎市の長尾クリニック院長、長尾和宏医師(53)の携帯電話が鳴った。訪問看護師からの連絡だった。西宮市の患者が自分で胃ろうの管を外してしまったという。

胃ろうとは、流動食や水分、薬を胃に管で直接入れるために腹にあけた穴。口から飲食できない時の栄養補給法だ。患者は75歳の男性。05年11月、西宮市内の病院でアルツハイマー型認知症の診断を受けており、デイサービスで入浴時に管を抜いてしまったのだ。

胃ろう栄養法は鼻から管を挿入する方法と比べて不快感や苦痛が少ないとされ、症状によっては効果が大きい。一方で、日本では高齢者の「延命措置」となっている面があり、安易な利用には介護現場で批判もある。

男性が西宮市内の病院で胃ろうの造設手術を受けたのが、09年10月。その約2カ月後に別の病院に移ったが、家族がそこの対応について「あまりにずさんではないか」と疑問を持ち、西宮市のNPO法人「つどい場 さくらちゃん」に相談。長尾医師を紹介された。

その数日後に退院して在宅介護に。手術をした病院は誤嚥(ごえん)(誤って気管に飲み込むこと)による肺炎を心配して口からの飲食には消極的だったというが、家族は「誤嚥しても肺炎になるとは限らないし、自分の唾液を誤嚥して肺炎になることもある」という長尾医師の言葉を支えに少しずつ口から食べさせた。

そして、10年5月には長尾医師の指示を受け胃ろうでの栄養剤注入を中止。被災地で男性が管を抜いたと聞いた長尾医師は「良かったね。口から食べているので、管をまた入れる必要はないでしょう」と電話に応じた。

男性は今も胃ろう栄養法を使っていない。妻は口から食べられるようになったことに「胃ろうとでは、排便をおむつにするのとトイレでするくらい違うんです」と話し、「胃ろうの手術を依頼するまでの家族の苦悩が分かりますか」と続けた。

【香取泰行】

=つづく

## まるちゃんから ひと言

「胃ろうを造っても、口から食べられるようになる人もいます」(つどい場さくらちゃん理事長)

阪神

メガネ専門店
フナモ
営業時間／10時～19時(毎週水曜定
伊丹市中央2-2-12
☎072(782)34

# かごのいろは

つどい場さくらちゃんから ㉚

## 「自分でいいと思った道を」

認知症と診断され、今年4月に71歳で亡くなった夫の皓さんについて、松井正子さん(67)＝西宮市＝は「徘徊や暴言もなかった。家には娘夫婦も孫もいたし、他の人と比べたら、夫の介護は大変ではなかった」と話す。それでも、知人には夫の症状をなかなか打ち明けられなかった。

毎年開いていた、高校時代からの女性ばかり6人の仲良しグループの同窓会でもそうだった。松井さんは「自分だけみじめな感じがして」と、当時を振り返る。

それでも、皓さんの世話もあり、いつまで参加できるか分からない。08年3月、いつものようにホテルでバイキングの昼食を囲んでいる時、思い切って「いい話じゃないんだけれど」と切り出し、認知症のことを話した。涙声で「次からは皆に会えない」と告げた。

「ふくちゃん、毎月会おうよ」。数日後、メンバーの1人から電話があった。「ふくちゃん」は松井さんの旧姓の愛称。それから、毎月の食事会が始まり、他のメンバーから義母を介護している話も出るようになった。

松井さんは02年に乳がんの診断を受けた。現在は治療で再発の可能性はないというが、当時は皓さんと「死ぬ時は一緒」と話したこともあったという。

胃に管を通して栄養補給する「胃ろう」を断って入院先の病院から皓さんを自宅に連れて帰り、在宅でみとった松井さん。「(胃ろうを)夫が望むだろうか」と悩み、親類にも相談した上で決めたことだった。

松井さんは「胃ろうがいいとか、悪いとかではなく、自分でいいと思った道を選ぶことが大事。そうでないと悔いが残るだけ。最後はいい介護ができたと思います」と話す。

今、松井さんは独り暮らしの82歳の姉の自宅に週1回通い、ほかの親類と交代で介護をしている。そして、「つどい場さくらちゃん」で介護家庭を支える活動に参加しようと考えている。

【香取泰行】

＝次回以降は来年、再開予定です。

### まるちゃんから ひと言

「介護でも近所や身内など周囲との関係作りが大事」 (つどい場さくらちゃん理事長)

阪神

あなたの健康応援し
宝塚第一病院 宝塚リハビテーション
救急告示 労災指定 天然温泉
www.takarazuka-daiichi-hp.or.jp www.takara-reha

# かごのいろは

## つどい場さくらちゃんから ㉙

## 周りに打ち明けられず

松井正子さん(67)＝西宮市＝は今春、夫の故・晧さん(当時71歳)に胃ろうをつけることを断り、病院ではなく自宅でのみとりを選択した。晧さんは当時、認知症の診断を受けた終末期の患者だった―。

「俺、仕事やめたいんや」。「今から帰る」という松井さんへのいつもの電話のなかで、晧さんはこう打ち明けた。96年のことだ。

当時勤めていた交通関係の職場は、前年の阪神大震災で仕事量が一気に増えていた。松井さんにも、晧さんが疲れ切っていることは分かっていた。

晧さんはその年の秋に退職し、パート務めをしながら旅行やゴルフを楽しみ、衛生管理者などの資格を取ってチラシをみて勤め始めた工場のパートの仕事を、1カ月で辞めてしまった。晧さんは「何回言われても、人の名前が覚えられない」と話した。

翌02年に病院の脳神経科で診断を受けた際には「日常生活には支障ないでしょう」と言われたが、04年6月に別の病院でMRI検査を受けると、「前頭側頭葉型認知症」と診断された。

07年2月にはMRI検査で「脳の血流が悪くなっている」と言われ、5月には肺炎で2週間入院。診療科は内科だったが、入院したのは精神科の病棟だった。夜は体の上にベルトを交錯させてベッドに拘束された、という。

その年の7月から、自宅近くのデイサービスを利用するようになった。それまで、松井さんは夜はほとんど泣いて過ごしていたという。転機は、晧さんと訪ねたNPO法人「つどい場さくらちゃん」だった。

「この人(夫)の面倒を、15年みているのよ」という介護家族の笑顔に出会い、「私はまだヒヨコ。頑張らなくては」と思ったという。しかし、松井さんはその時はまだ、高校時代からつきあっている親友たちには、晧さんの病気のことを打ち明けられずにいた。

【香取泰行】

＝つづく

過ごした。60歳の時には初孫もできた。

そして、01年2月。

## まるちゃんから ひと言

「松井さんもつどい場でふっきれた一人」
(つどい場さくらちゃん理事長)

阪神

いつまでも、あると思わないで。境
兵庫県土地家屋調査士
〒650-0017 神戸市中央区楠町2-1-1
TEL 078-341-8180
検

# かごのいろは

つどい場さくらちゃんから ㉘

## 夫のことを考え決断

夫の晧さん(当時71歳)が右足骨折の手術を終え、この病院に転院して1カ月ぐらいしたころだった。松井正子さん(67)=西宮市=が訪れると、看護師から「今は面会できない」と言われた。同室の人が亡くなったところだから、という。「前の病室が空いているから、夫を移してほしい」と言っても、聞いてくれなかった。

「夫が認知症だから?」と思うと、情けなかった。晧さんは肺炎、尿路感染を併発していた。それでも「家に連れて帰りたい」と思った。

病院側から勧められた、腹の表面から胃につながる管をつける胃ろうについても「(これ以上の治療を)夫が望むだろうか」と疑問だった。胃ろうは口から食事を取れない場合の栄養補給方法で、患者の症状などによっては効果が大きいが、一方で、終末期の高齢者への利用については賛否が分かれている。

松井さんは晧さんの兄妹に相談。「自然にまかそう」「お義姉さんのいいようにしたらいい」と言われ、胃ろうを断った。病院側からは「本人も家族も楽なのに」と何度も言われたという。

そして今年3月28日、松井さんは次女、ケアマネジャーと病院に行き、次女と2人で晧さんを家に連れて帰った。その日の夜、退院について相談していた開業医が水をそっと口に含ませると、晧さんは「ごっくん」と飲み込んだ。

翌日、訪問看護師が来て、ケアマネジャーが訪問散髪と入浴を手配してくれた。散髪は2カ月ぶり。31日には3カ月ぶりに風呂にも入った。訪問入浴2日目、ベッドに戻った晧さんの顔つきは、以前のおだやかな表情に戻っていた。食事もおかゆや茶碗蒸しをスプーンで口から食べさせることができた。

そして、晧さんは4月6日夜、自宅で息を引き取った。昼間には同居の孫と一緒にプリンを口にしたという。

認知症の終末期にある家族をどう介護し、どうみとるか。松井さんは「夫のことを考え、自分で決断したことです」と話している。

【香取泰行】

=つづく

まるちゃんから ひと言

「死は怖くない。いいみとりをすることが大事」
(つどい場さくらちゃん理事長)